

Book Preview

富山高校図書館 2025.5



『 文系のための東大の先生が教える免疫と感染症 』

石井 健【著】

私たちの身のまわりには細菌やウイルスなど、さまざまな病原体がいます。それらから私たちの体を守るためのしくみが「免疫」です。免疫によって体に侵入してくる病原体をやっつけることで、私たちは病気にならずに元気でいられるのです。本書では免疫のしくみとさまざまな感染症について、やさしく丁寧に紹介します。私たちの健康を考えるうえで欠かせない免疫のしくみを基礎からよく理解できる1冊となっています。どうぞ免疫の驚くべき世界をお楽しみください！

『 銀河の図書室 』

名取 佐和子【著】

「ほんとうの幸い」って、何だろう？瑞々しく、愛おしく、胸に響く傑作青春小説！県立野亜高校の図書室で活動する「イーハトー部」は、宮沢賢治を研究する弱小同好会だ。部長だった風見先輩は、なぜ突然学校から消えてしまったのか。高校生たちは、賢治が残した言葉や詩、そして未完の傑作『銀河鉄道の夜』をひもときながら、先輩の謎を追い、やがてそれぞれの「ほんとう」と直面する。今を生きる高校生たちの青春と、宮沢賢治の言葉が深く共鳴する感動長編。



『 世間胸算用 』

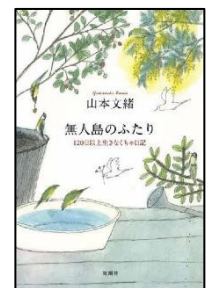
井原 西鶴【著】

一年の収支決算日である大晦日その日の事件を軸に、貧乏に追われる庶民の悲喜劇を描いた「連作短編小説」。六軒の裏長屋住人のその日暮らし、正月飾りのことで息子を叱る隠居婆、亭主の入れ替わりで借金取りから逃れようとするもの、絶望にたえる貧者とその女房の夫婦愛など。落語のようなオチを交え、無名の人々の滑稽さや可笑しさを、愛情にみちたまなざしで掬い取った傑作をリアルにストレートに伝える関西弁での現代語訳。

『 無人島のふたり 』

山本 文緒【著】

お別れの言葉は、言っても言っても言い足りない——。急逝した作家の闘病記。これを書くことをお別れの挨拶とさせて下さい——。思いがけない大波にさらわれ、夫とふたりだけで無人島に流されてしまったかのように、ある日突然にがんが診断され、コロナ禍の自宅でふたりきりで過ごす闘病生活が始まった。58歳で余命宣告を受け、それでも書くことを手放さなかった作家が、最期まで綴っていた日記。



『 老後ひとり難民 』

沢村 香苗【著】

世はおひとりさまブームだが、「ひとり」のまま老後を迎えて本当に大丈夫だろうか？配偶者や子どもなどの“身元保証人”がいない高齢者は、入院だけでなく、施設への入居を断られることも多い。高齢で体が不自由になるなか、認知機能の低下で金銭管理が怪しくなり、果ては無縁仏になるケースも急増。本書ではこのような現実と直面している高齢者を「老後ひとり難民」と呼び、起こりがちなトラブルを回避する方法と、どうすれば安心して老後を送れるのかについて解説。読むだけで老後の生き方・考え方が劇的に変わる一冊。